

序

地域研究年報第39号は、2015年10月25日(日)から31日(土)、および2016年5月22日(日)から28日(土)にかけて実施した筑波大学大学院地誌学野外実験の成果を特集したものである。この野外実験には24名(2015年)、38名(2016年)の大学院生が参加し、呉羽、堤および山下3名の教員で指導に当たった。さらに、宮坂和人氏、橋本操氏、福井一喜氏に現地での指導協力をお願いした。昼間は、大学院生がそれぞれの研究テーマに関してフィールドワークを行い、夕食後のゼミでは、フィールドワークの結果報告に関して熱心に議論をした。本号に収録された論文はこうした研究成果をまとめたものである。ただし、これ以外にも今回の調査結果を基礎としてまとめた論文がすでに刊行されている(渡辺亮佑・Gaston Guido San Cristobal・山下亜紀郎・橋本 操(2016):長野県北信地域のスキー場周辺における土地利用の変容 -戸狩温泉スキー場および野沢温泉スキー場を事例に-。人文地理学研究 36: 55-75.)。

今回の地誌学野外実験の調査地域は、長野県北東端の飯山地域である。これまで、長野県内の松本、諏訪、長野、須坂、飯田、佐久といった都市とその周囲を含めた地域が調査対象とされてきており、未調査地域として飯山地域が選ばれたわけである。しかし、飯山地域に関する文献を集めている過程で、戦前に飯山地域で野外実験が行われていたことが判明した。1929(昭和4)年に本学の前身・東京文理科大学地理学科の野外実験(当時の名称は「信州北部研究旅行」)が実施されていたのである。田中啓爾教授および梶田一二助手指導のもと、青野壽郎、安達茂夫、崎田龍二、蛭田浩一郎、三野興吉の5名の学生が参加した。青野の記録によれば(東京高師地理学会会報、第6冊、30-31頁、1930年)、東京高等師範時代には団体的でかつ広地域の研究旅行を行ったので、此度一定の狭い地域を各自別々に研究問題を決めて行動することに模様替えをしたとある。ちょうど現在の地誌学野外実験が有する伝統的な実施形態が、この飯山で生まれたことになるのかもしれない。当該「研究旅行」では、1929年11月6日夜に上野駅を発ち、翌7日から11日まで飯山市の旅館を拠点に各学生が調査を行い、夜はそれぞれの調査結果について議論した。最終日の12日には、三野が調査した平丸峠(旧信濃平スキー場上部)を全員で訪れ、飯山平を見下ろした時は実に愉快であったという感想が記録されている。この調査結果をまとめた論文は、1933年に古今書院から刊行された『大塚地理学会論文集第1輯』(同学会編)に掲載されており、その一部は本報告書の論文でも引用されている。

飯山地域は、飯山市とその周囲の町村を含んだ範囲である。ただし、今回の調査地域は、野尻湖が位置する信濃町、野沢温泉、新潟県妙高市・上越市を、さらに煙火産業の盛んな長野県北信地域のさまざまな市町村を含んでいる。飯山地域を特徴づけている要素は複数あるが、その中でも重要なものは雪、中位山地、城下町、中心都市などであろう。

飯山地域は、日本有数の豪雪地域でもある。雪は、除雪やかつては出稼ぎといった生活に不利な側面をもたらし、近年は空き家増加とも関連している。しかし、その一方で1960年前後以降は、スキーを媒介とした雪の利用が戸狩や信濃平に経済的恩恵をもたらしてきた。ただし、スキー観光の停滞は、過度にスキー観光に依存した社会経済構造に大きな打撃を与えてきている。また、雪の豊富さは、伝統的には稲作、近年ではアスパラガス栽培という農業の発展をもたらしてきた。大量の雪の存在を強みとするようなまちづくりが今後も重要になるのであろう。

雪が豊富であるとはいえ、飯山地域では、斑尾山を含めても中位山地が卓越することによって、スキー場は中規模なものに制限されてきた。千曲川対岸の野沢温泉、さらには志賀高原や妙高などと比べるとゲレンデ規模が小さいことが、飯山地域においてスキー観光停滞の影響を受けやすくなっているように

思われる。しかし、標高に大きな変化のない関田山脈の地形的特徴は、トレッキング・ツーリズムの展開をもたらしている。また、千曲川東岸の瑞穂のように棚田を活用したルーラル・ツーリズムもみられる。

飯山市街地では、寺町で城下町の雰囲気を楽しむことができよう。そこに近接する雁木をともなった愛宕町通りには仏壇製造業の集積がみられ、その起源は城下町時代に遡ることができる。飯山市は、明治期以降、行政や業務、商工業、教育などの多くの機能を備えた中心都市としての地位を担ってきた。しかし、全国の地方中心都市がそうであるように、中心商店街をどのように持続するか、雇用効果の大きい工業を地域経済にどのように位置づけるかが大きな課題となっている。

2015年3月、北陸新幹線が金沢まで延伸すると、飯山駅が停車駅となった。東京から直接到達できるようになり、時間距離もかなり短縮されたことによって、訪問者が増加している。スキーシーズンには野沢温泉や斑尾高原に多くの外国人スキーヤーが訪れるが、彼らの利便性は劇的に向上した。もちろん、日本人観光者の訪問も継続するであろう。そうした人々を雪や城下町などの飯山地域の特性に基づくツーリズムに巻き込むような仕掛けが必要となるに違いない。

本報告書は、さまざまな側面からみた飯山市をはじめとする飯山地域の地域性を明らかにしようとしたものである。本冊子の内容が、飯山地域やその隣接地域の人々にとって何らかの役に立つことができれば、地域研究の一端をになうものとして望外の幸せである。

現地調査に際しては、飯山市関係部署の方々に、資料の提供や閲覧の便宜をはかっていただいた。また、いいやま観光局、野沢温泉村、信濃町、飯山市立図書館、飯山商工会議所、JA北信州みゆき、諸公民館など数多くの関係機関の方々からも貴重なご意見やご協力をいただいた。さらに、聞き取り調査やアンケート調査のために訪れた事業所や農家、工場、商店、宿泊施設、さらには市民の方々に親切に対応していただいた。以上、記して厚くお礼申し上げる次第である。

2017年1月
呉羽 正昭